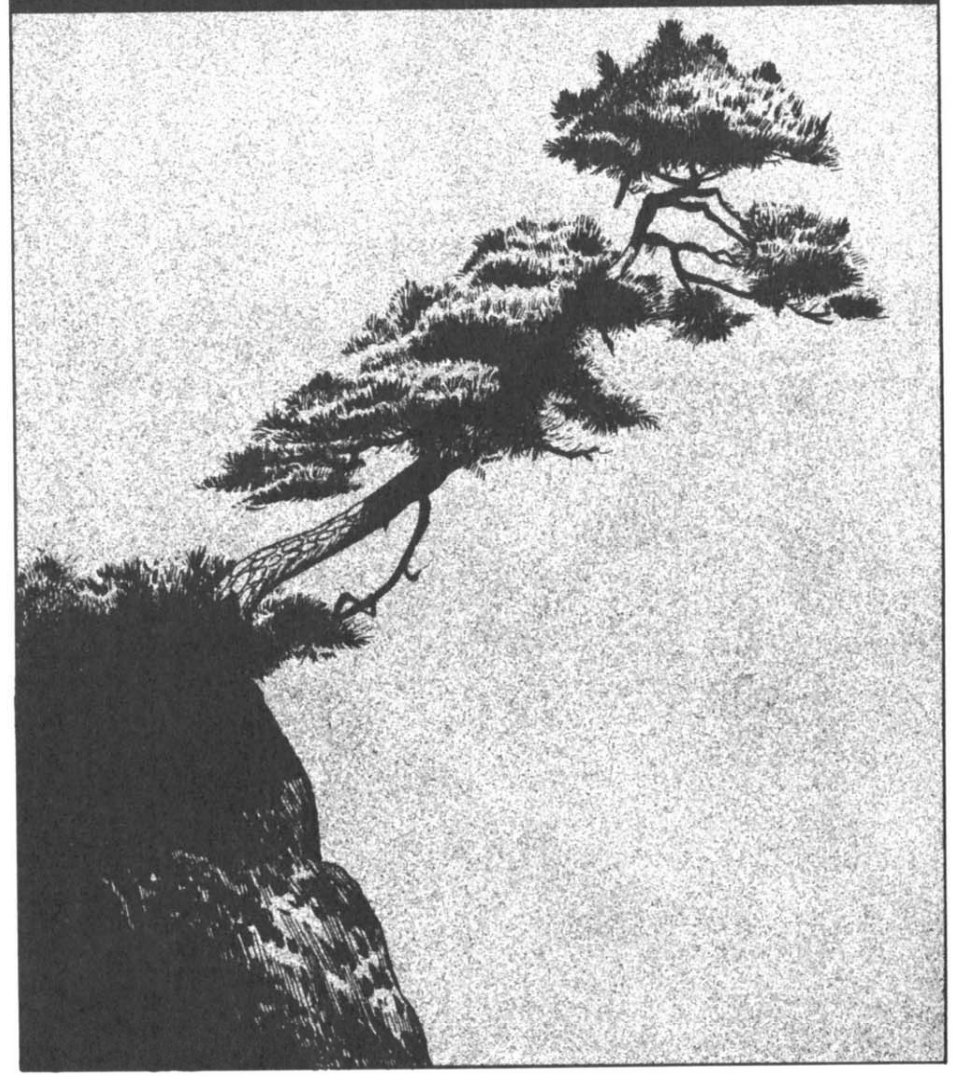
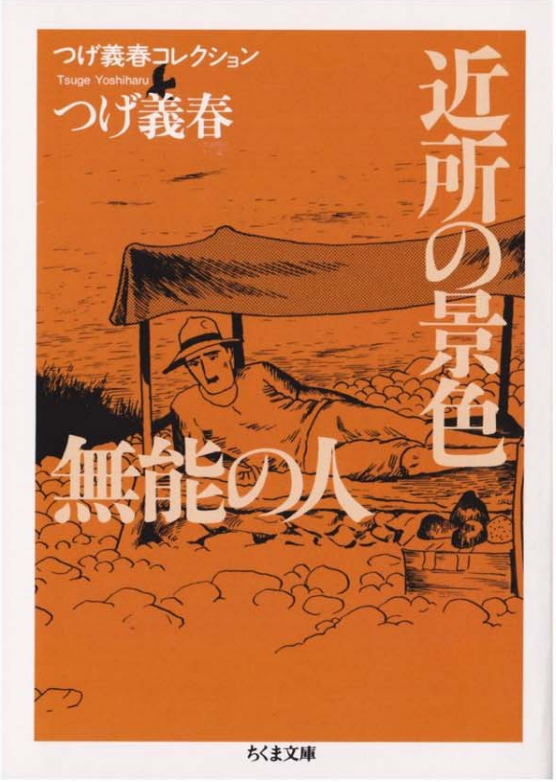
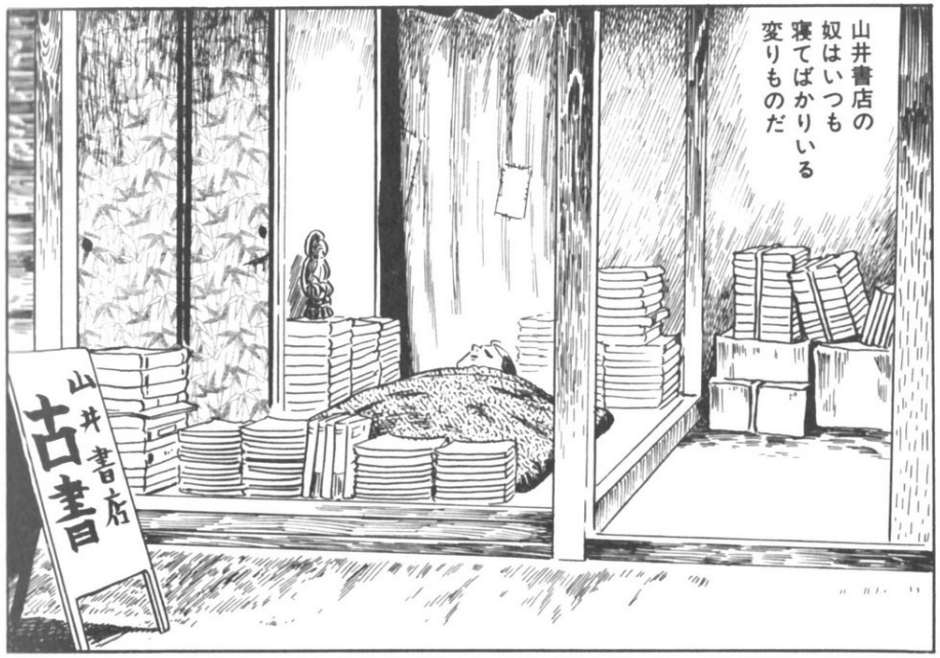
蒸　発



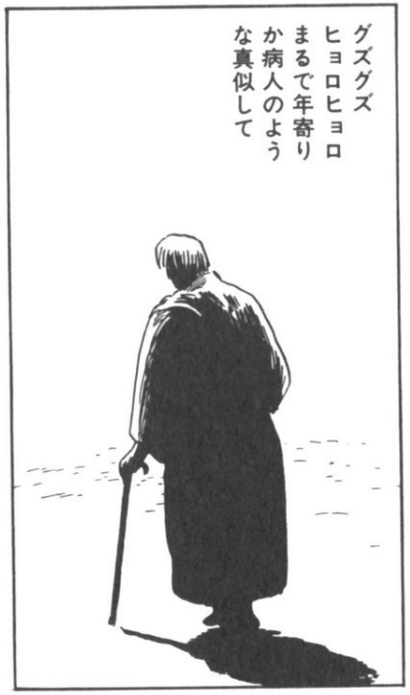



山井書店の
奴はいつも
寝てばかりいる
変りものだ
山井書店
古書

まったく
やる気を
みせず
ユウウツ
そうに
していい
るから
客も
寄り
つかない

それでも
どうにか
生活している
から不思議
だ

この間
珍らしく
散歩なんか
していた
けど


グズグズ
ヒョロヒョロ
まるで年寄り
か病人のよう
な真似して

私は真理である

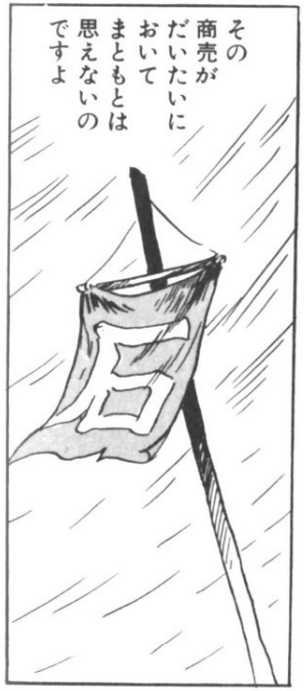
奴の妻君
の話じゃ
病気ひとつ
したことない
というのに

どうゆう了見なんです

あんたに感化されたんでしょうな
オレに？

あんただっていつも寝てばかりいるじゃありませんか

そりゃまあたいして忙しい商売じゃないですからな
水石フェア


その商売がだいたいにおいてまともとは思えないのですよ
白

その辺で拾った石を売るなんて

売れるわけがないのを承知の上でしょう

売れないということは結果的に何もしていない
つまり寝ているのと同じようなものじゃありませんか

ようするにあんたはなんの役にも立っていない
存在価値がない

ひどいことを言うね
結果はどうあれオレは一所懸命やっている
努力しているんだ

ふりをしているだけでしょう

私はあんたほどシビアじゃないけど
こうして自分なりに工夫しているわけですよ

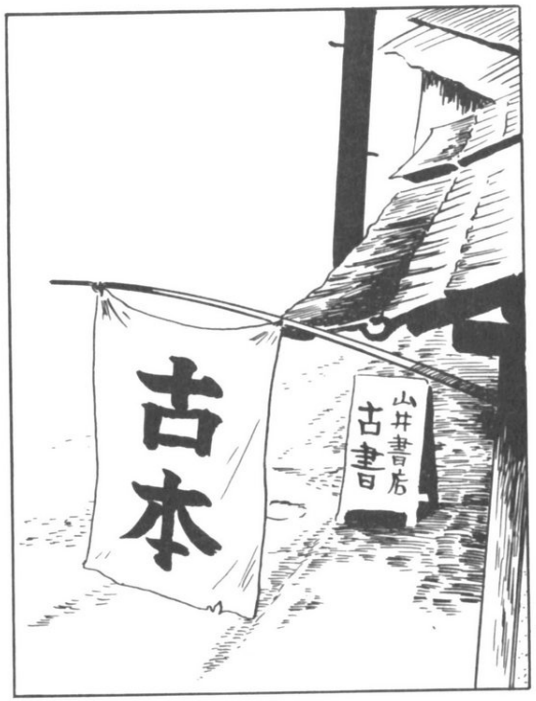
その廃人のような真似が？
こうしていると まるで病人か年寄りとか

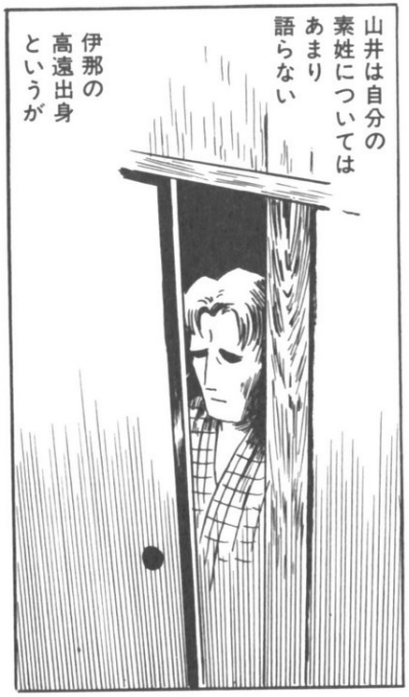
女房にあいそうつかされたふぬけとか窓際族失業者とかようするに役立たずの零落者のように思われ
誰も相手にしてくれません

当然でしょ
誰からも期待も依存もされません

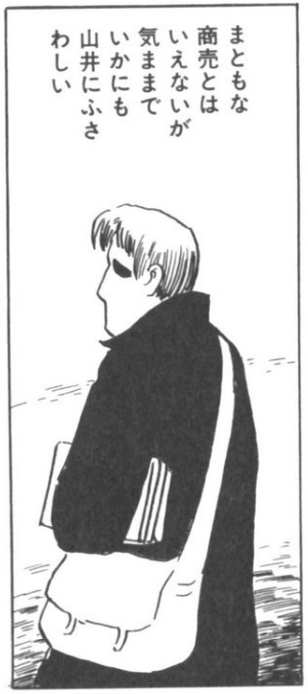
役立たずとして社会から捨てられます

捨てられた私は存在しないも同然です
「いながらにしていない」ということです
なんのこっちゃ？


古本
山井書房
古書


山井は自分の素姓についてはあまり語らない
伊那の高遠出身というが

噂によると以前は古本の背取師（業者から掘出し転売する）をしていたようだ


まともな商売とはいえないが気ままでいかにも山井にふさわしい

それがこの町に住むようになったが
この町に古本屋はなかった

ところが電話帳に一店出ていたので行ってみると店舗はなかった

私どもでは目録販売とか古書展専門でして
ちょっと本を拝見できませんか

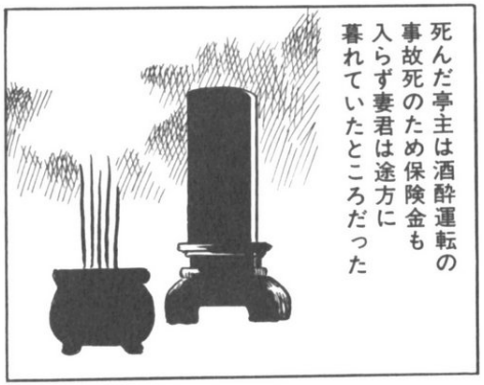
せっかくですが現在は営業しておりません
やめられたのですかこんなにたくさん本があるのに

はい主人が亡くなりまして私には本のことは分りませんので

では廃業されたらこの本はどうなるのですか
さあどうしたらよいものやら
二三の同業の方がひきとって下さると云うのですがあまりに安いことを申しますので……

それでしたら是非私に譲って下さい

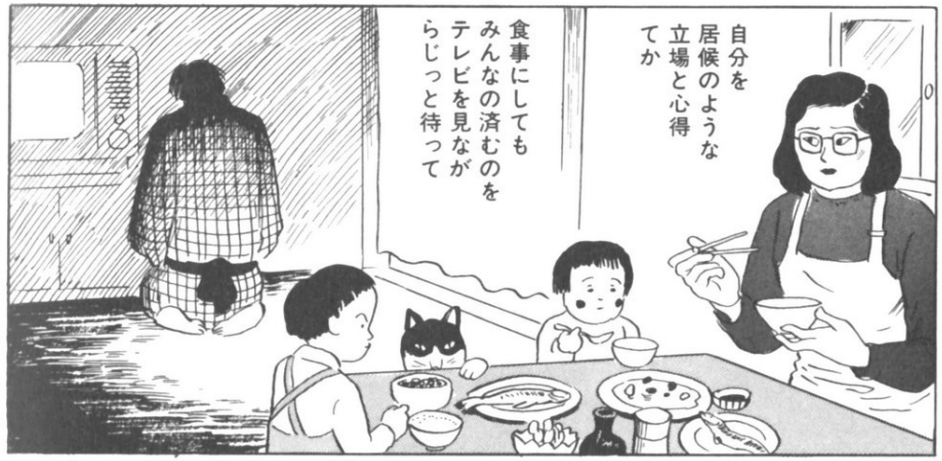
そうして何度か背取りに行くうちにその後家さんとできてしまった


死んだ亭主は酒酔運転の事故死のため保険金も入らず妻君は途方に暮れていたところだった

死んだ亭主の名前が山井一郎で奴は表札に横棒一本足して山井二郎になった
山井二郎
いいかげんな奴だ

そして古本屋を開業したがひどい怠けものなので妻君は大いに失望した

しかしママ児いじめするでなし性質は温順怒ったのをみたことないという


自分を居候のような立場と心得てか
食事にしてもみんなの済むのをテレビを見ながらじっと待って

食べ残しを食べるといった工合とか……

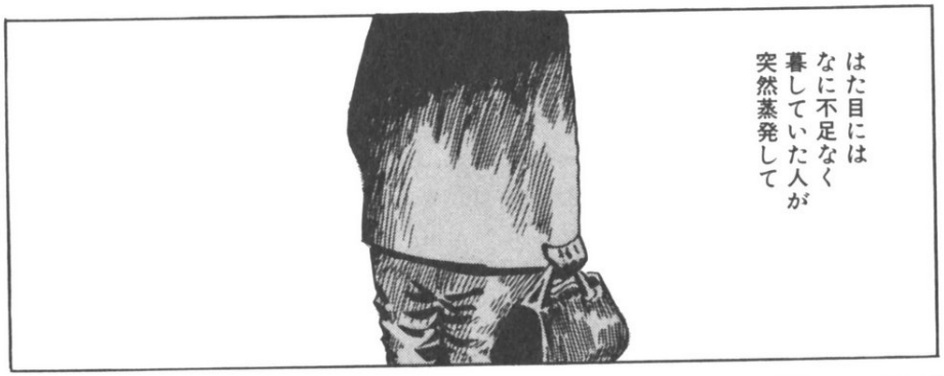
ただちょっと気になるのは郷里の伊那にも所帯があるのではないかとの噂がある

そんな噂が出るのは奴が時どき妙なことを口走るからだ

どうせ私はいずれ帰るのだから……

ほんのちょっとこっちに来ているだけですから

おたくひょっとしてこっちに蒸発して来たんじゃないの
ふふ……蒸発ですかひと頃取沙汰されたことがありましたな


はた目にはなに不足なく暮していた人が突然蒸発して

何処かの温泉地で三助していたとか
乞食していたとか

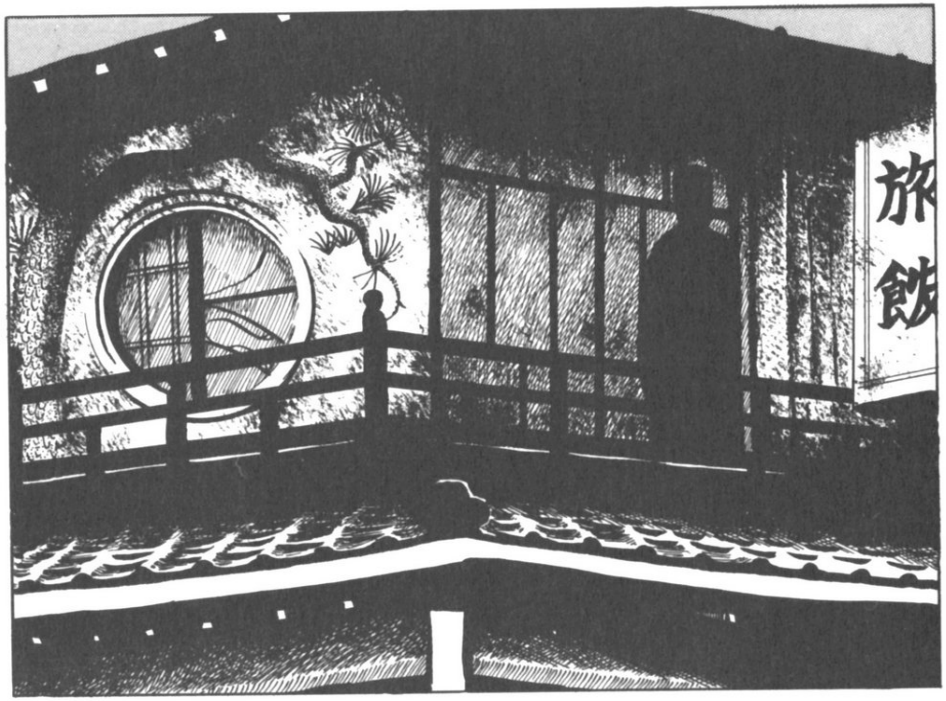
よくある話ですね
よくあるのですか

鴨長明の「発心集」とか

西行の偽作と伝えられる「撰集抄」など蒸発譚だらけですよ

そんな昔から蒸発があったの

しかし自分のすべてを捨てて蒸発するってのはなんだろう


旅

自分を「あってない」と観想するための具体的方法でしょう

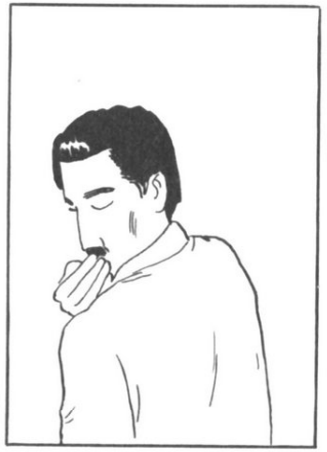
あんたの
韜晦無能
ぶりも似て
ますな

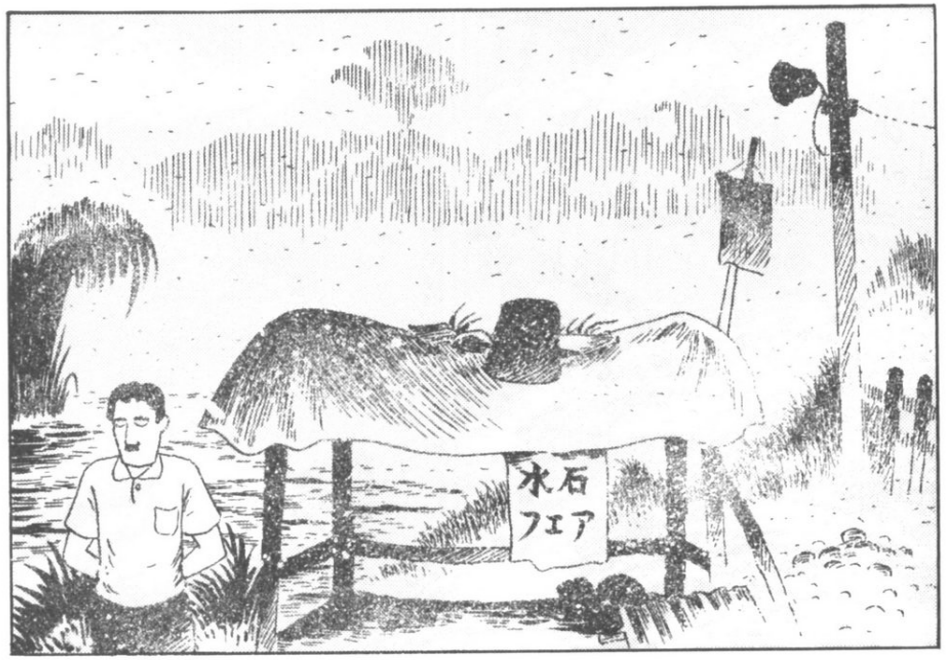
自分を役立た
ず無用の者
として社会
から捨てる
蒸発して
いるような
ものじゃ
ありませんか

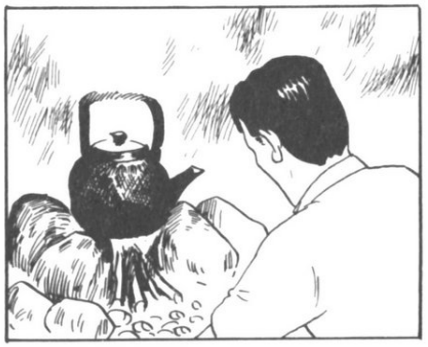
だけど
おたくの
場合は
いずれ
帰るのでしょ

まあ私は
ほんの
一時的に
こっちに

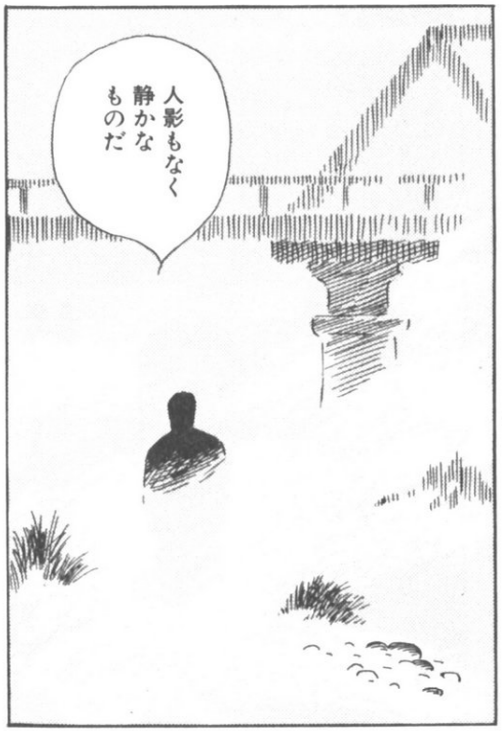
この世に
来ている
だけです
から……




氷石
フェア



今日は
やけに
霧が濃い
な


人影もなく
静かな
ものだ

クワーッ
何処かでサギが鳴いている

山井がこんな本を貸してくれた
漂泊俳人井月全集

おれは俳句のことなんか解らないのに郷里の誇りだからといって無理に押しつけられた

柳の家井月なんて名前も知らぬ

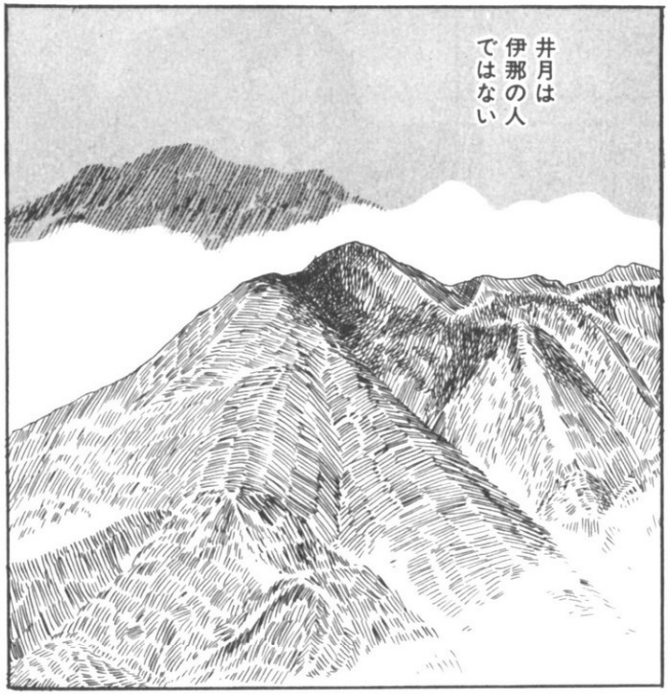
幕末から明治にかけての俳人だそうだが……

世に知られることなく伊那谷の底に沈んでいたとか

この全集一巻本が井月を伝える唯一の資料として残されたが
下島勲
高津才次郎
集
発行が昭和五年……

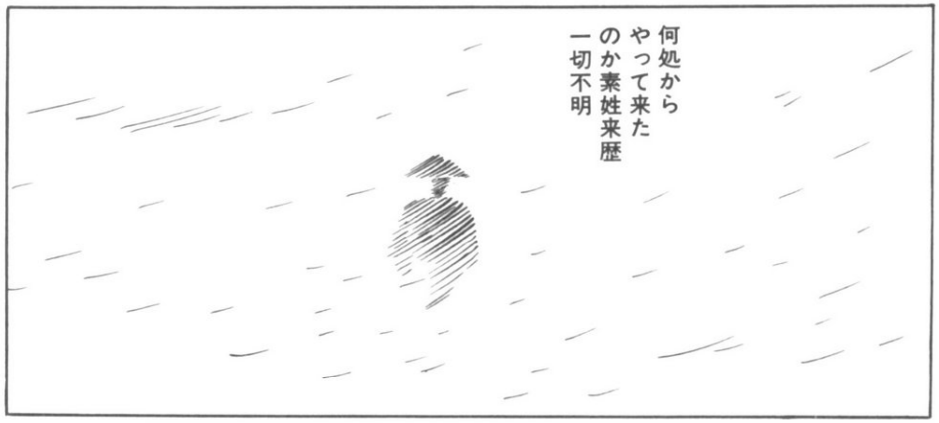
井月はおろか今ではこの本すら埋もれていると
山井は云ってた

そんな本を何故オレに読ませようとするのだ

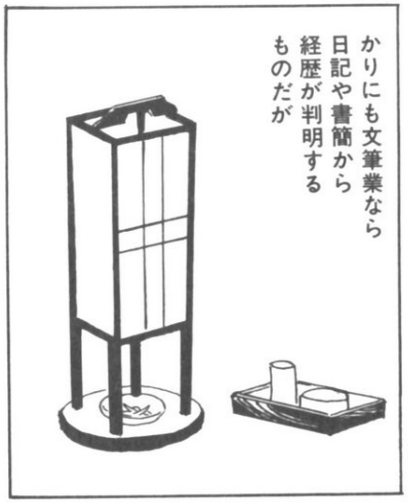

井月は伊那の人ではない

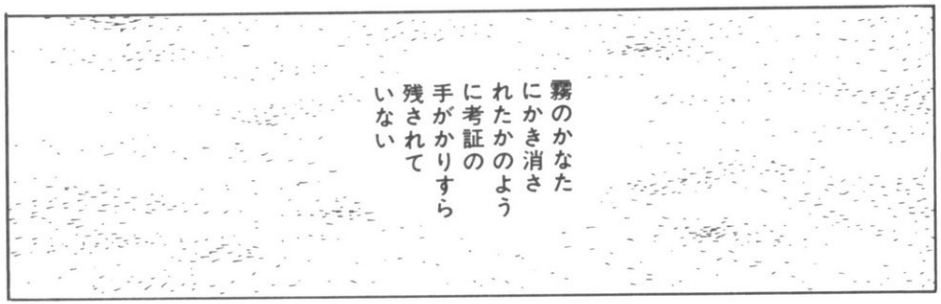
安政五年
井月三十六、七歳(推定)
忽然と伊那谷に
現われた

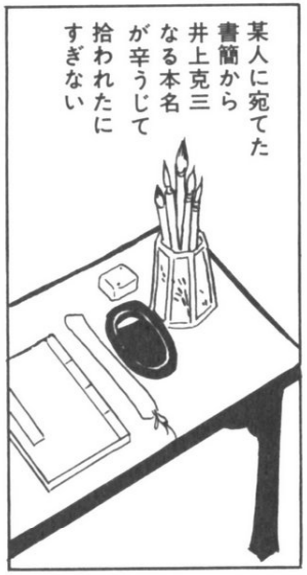
腰に木刀をさし
尾羽打ち枯した
浪人じみた
凄味があった
と伝えられる


何処から
やって来た
のか素姓来歴
一切不明

越後長岡藩士との説も
あるが推測の域を
出ない

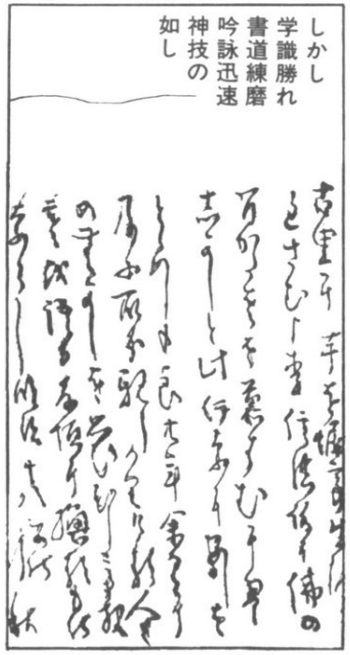

かりにも文筆業なら
日記や書簡から
経歴が判明する
ものだが


霧のかなた
にかき消さ
れたかのよう
に考証の
手がかりすら
残されて
いない


某人に宛てた
書簡から
井上克三
なる本名
が辛うじて
拾われたに
すぎない

はい
ごめんなさい
よ
浪人じみた
凄味も実際の
素顔は禿頭
無髯
眉も薄く
切れ長のトロリと
したヤブニラミの
きわめて間のぬけた
印象であったという

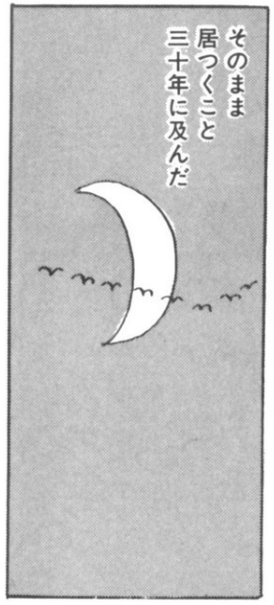
しかし
学識勝れ
書道練磨
吟詠迅速
神技の
如し



「鶴の声…」は井月の辞世の句とされているがだいぶ前の作であったとか
何処やらにサギの声きく……なんちゃって

井月さん石も理解していたんだな
「いつの世よりの石の肌」いいねえ

それにしても超インテリが山間のヘキ地ともいえる伊那谷あたりに何故やって来たのだろう


そのまま居つくこと三十年に及んだ

今は世に拾う人なき落栗のくちはてよとや雨のふるらん

伊那谷を落栗の窪溜りと定めたか……

芭蕉を崇拝していたというから片雲の風にさそわれそぞろ神のものに憑かれたか

伊那谷におけるその生活ぶりは
狭い谷底をあっちにウロ〳〵こっちにウロ〳〵一所不在の風来坊

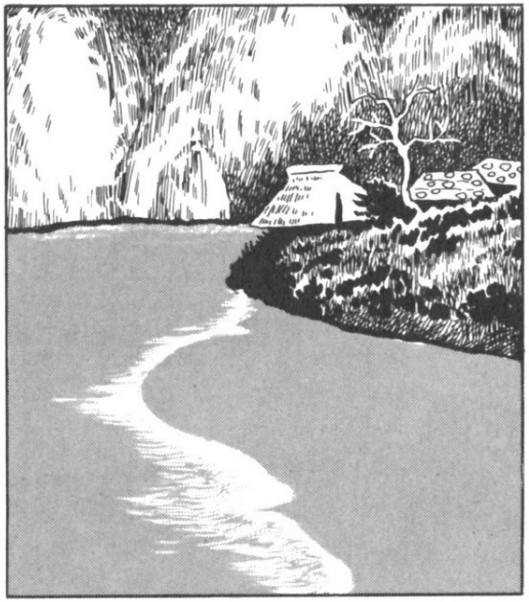
俳諧趣味のある
家を泊り歩き

随所で
昼寝も
すれば
野宿も
した

性質は
温順
礼儀正しく
紳士であった

千両
千両
きわめて沈黙家だったが
機嫌の好いときは
が
口癖で
あった

だが
無類の
酒好きで
強酒では
なかったが
すぐ泥酔
し
下痢
寝小便を
もらすこと
あった



そのうち
シラミはたかり
ヒゼンを病み
次第に
うとまれ
もてあまされる
ようになった

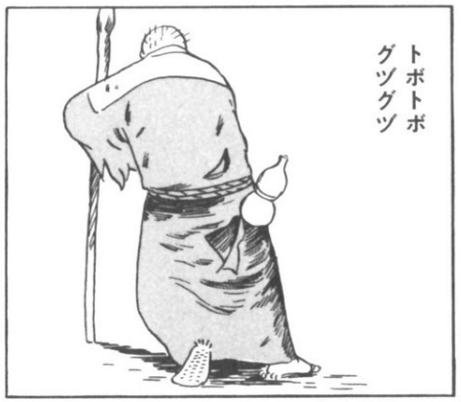
犬には追わ
れる

悪童には
わるさを
される
わ〜い
乞食
井月

シラミ
井月

ガツン

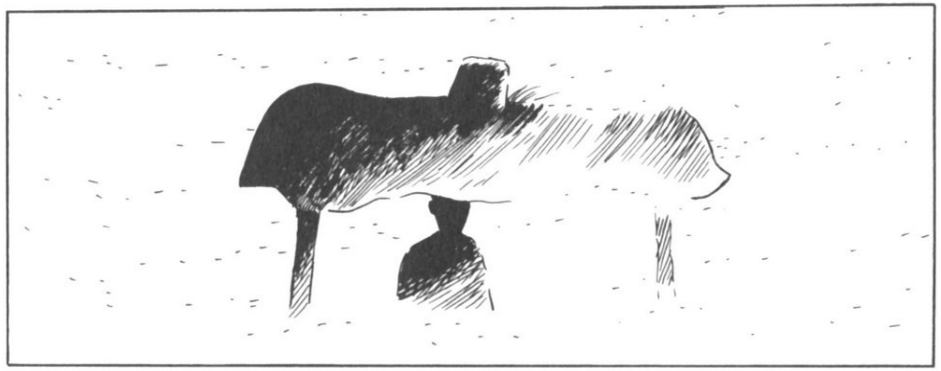
しかし
ついぞ
怒りを
見せた
ことない
という


トボトボ
グヅグヅ

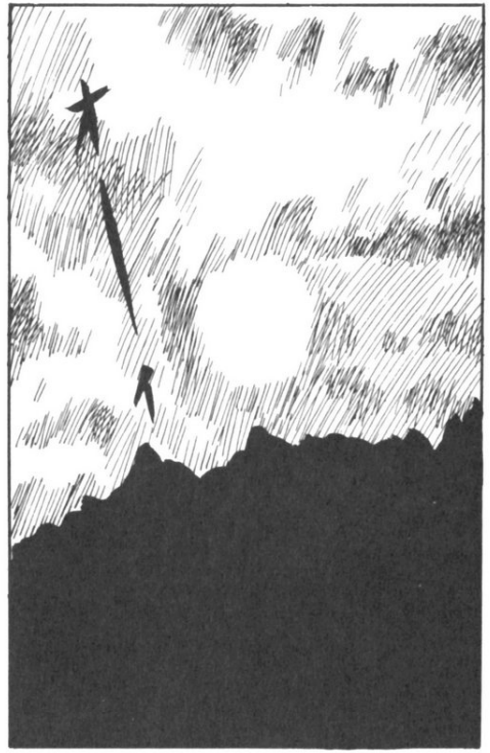
井月はアル中で
あったか
動作はひどく
緩慢でそれを
形容すると

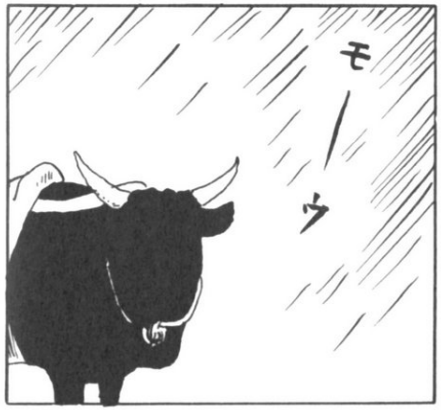
山井
……

ヒョロ
ヒョロ



すっかり
厄介者
あつかい
されるように
なった井月
は善光寺
詣に連れ
出され
捨てら
れた



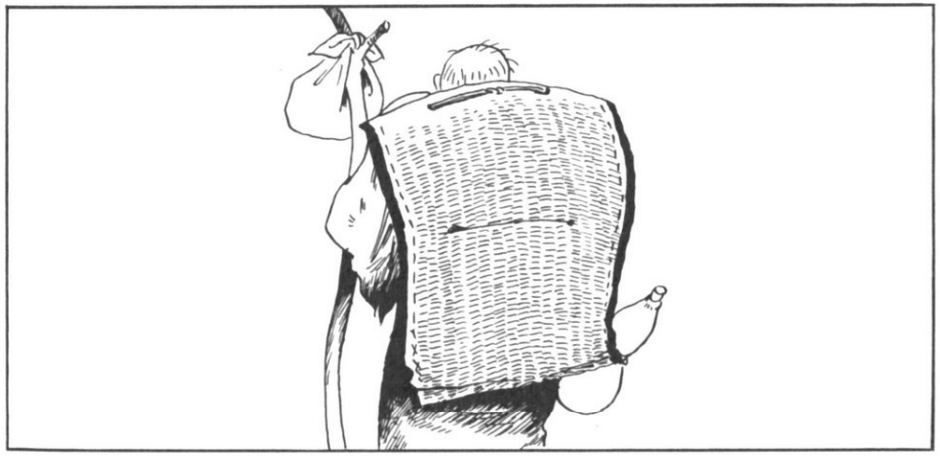

モーウ

善光寺は長岡に近い
そこから郷里へ帰るだ
ろうとの謀いだったが

シラミのように
くらいついて
伊那谷から
離れようと
しない
おっ
井月！
茶
茶

ほい
お土産の句

秋、経るや
葉に捨て
られて
梅もどき



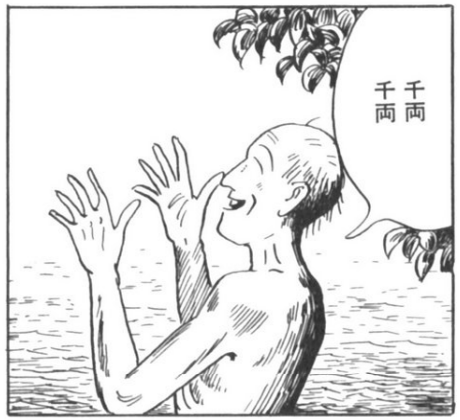
天地のひっくり返る
明治維新 文明
開化もどこ吹く風

もそ
もそ

プチン

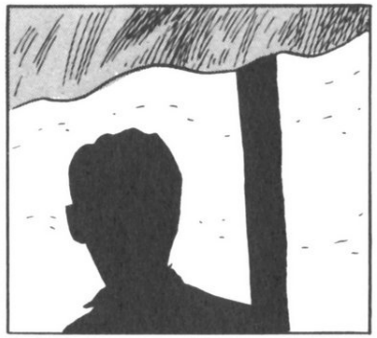
シラミが一匹
シラミが二匹
シラミが三匹

ふっ
ふふふふ


千両
千両

井月の
ささやかな
望みは
小さな草庵を
結ぶことだった
が
それも
かなえられ
なかった

草庵って
こんな小屋の
ことかな



晩年に至ると
親しくしていた
俳諧の友も軒先
で酒食を与え
戸を閉じてしまう
仕打ち……
みやげ？
お土産
です
大

なんだ ただの
葉っぱじゃ
ないか

バカに
するな

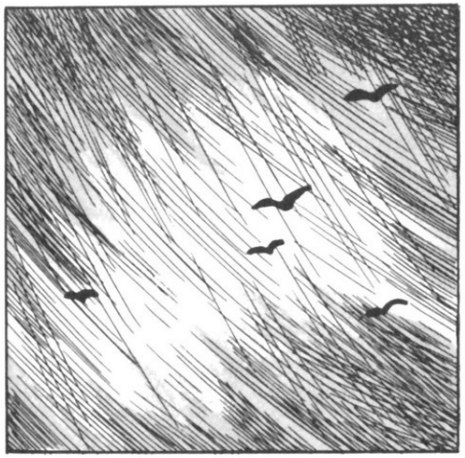
お前にくれて
やった綿入れ
羽織はどう
したのだ

乞食が
寒そうにふるえ
ていたので
くれて
やりました

井月
……

ザザ

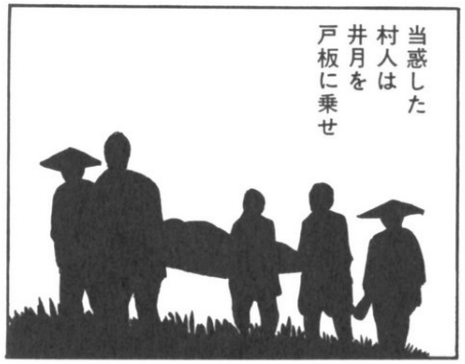
カァー
カァー



明治
十九年
師走
井月は
枯田の中に
糞まみれと
なって死んだ

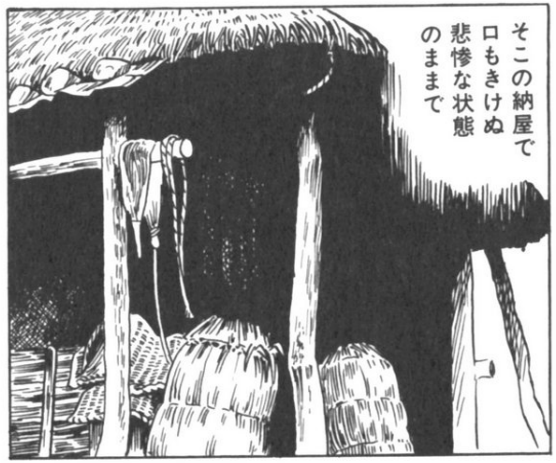
いや
まだ
かすかに
息が残って
いた

糞を
もらして
手がつけ
られんぞ


当惑した
村人は
井月を
戸板に乗せ

あっち
こっちと
たらい廻しに
した

そして井月と最も
縁故の深かった
俳友宅へかつぎ
こまれた

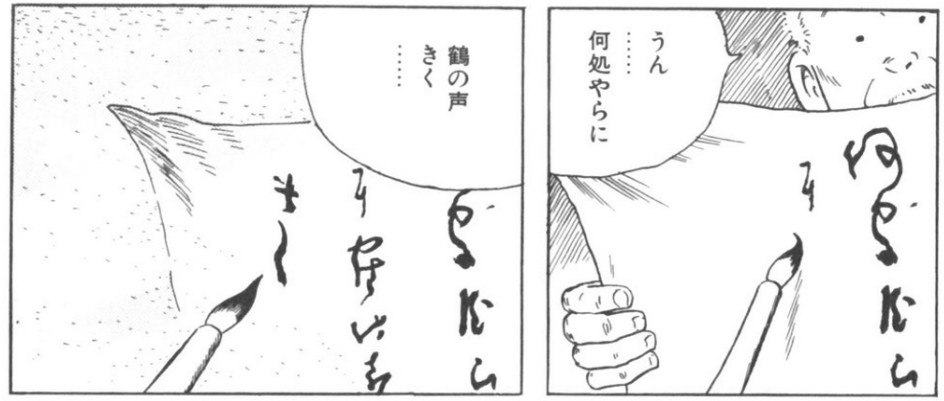

そこの納屋で
口もきけぬ
悲惨な状態
のままで

翌
明治二十年
三月十日に
死んだ
(六十六歳)

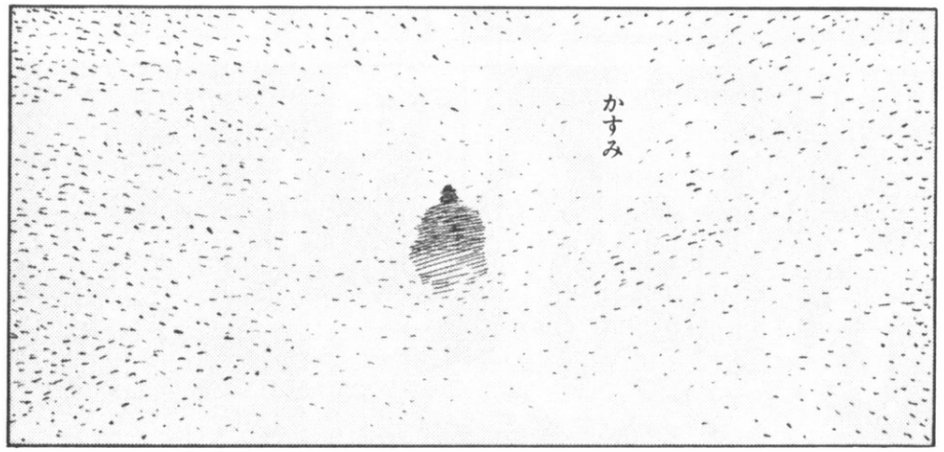
息をひきとる
間ぎわ 旧友が
辞世の句を
所望した
井月
辞世の句
を

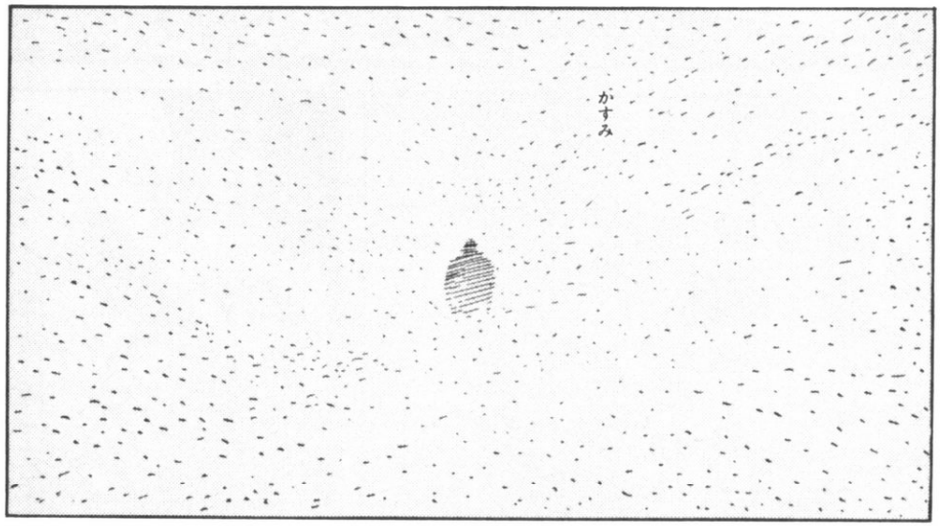
さあ
辞世の
あぁぁぁ

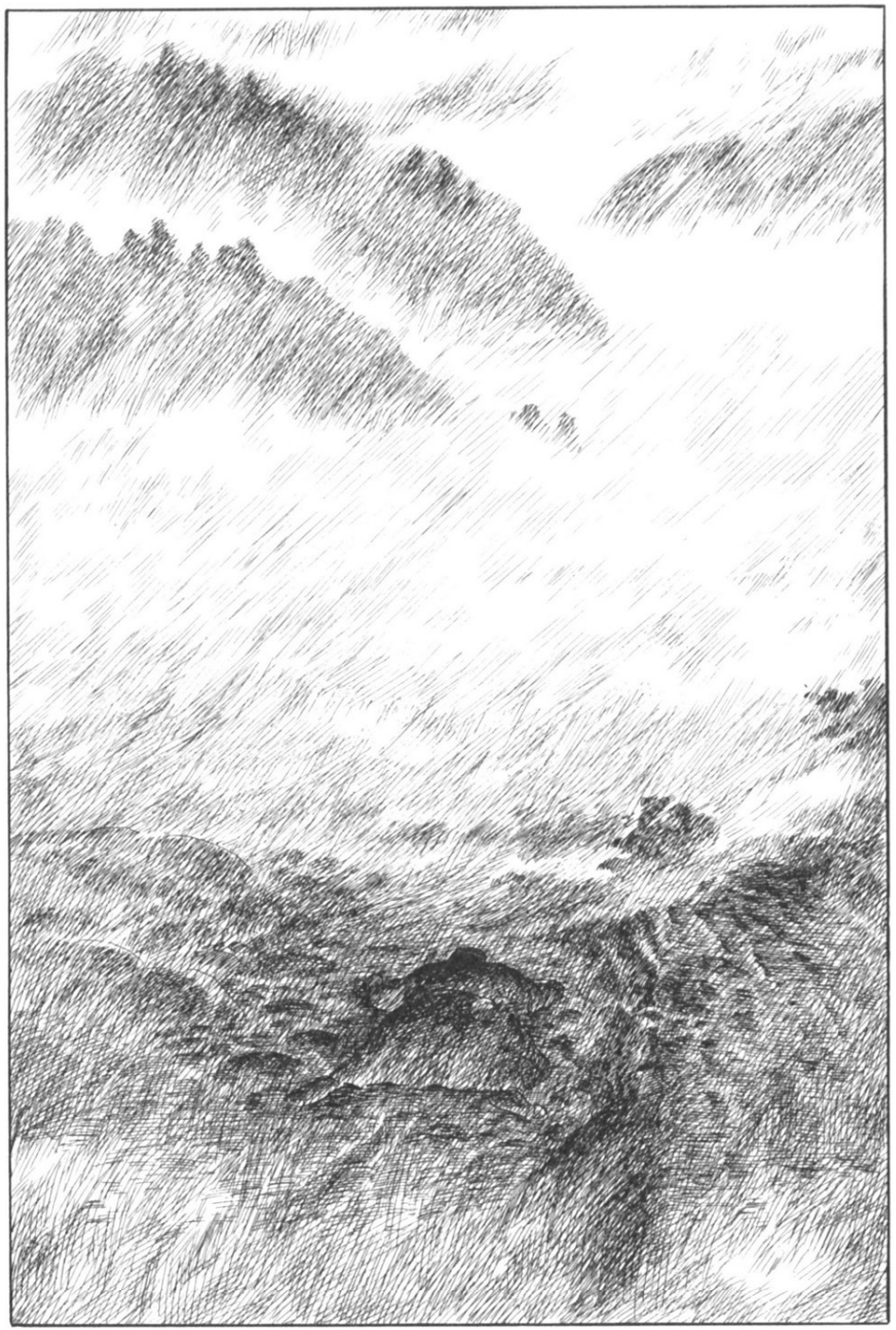
さあ

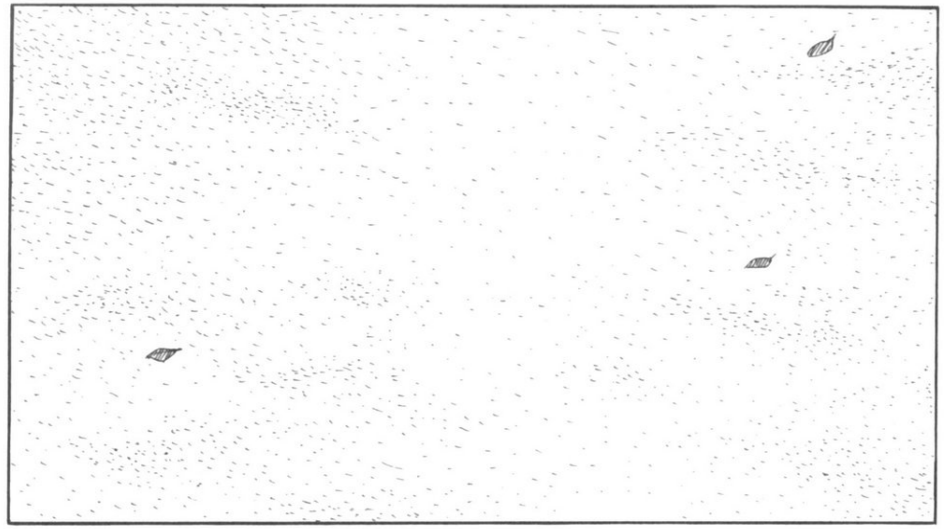

うん
……
何処やらに

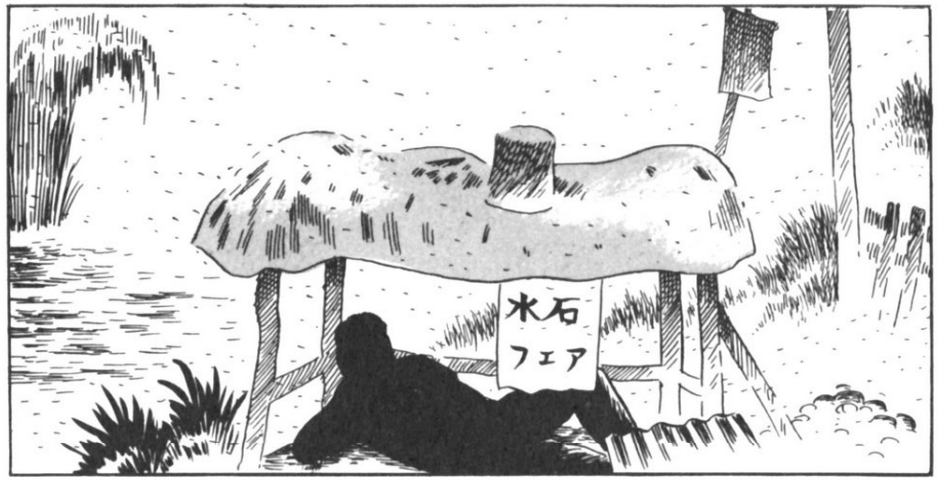
鶴の声
きく
……


かすみ


かすみ







*参考資料「高津才次郎篇『井月全集』」長谷川竜三『俳人井月』より